

明治20年頃の女性雑誌において「逸脱した母」とされた乳幼児の母親像

杉山 実加

はじめに

本稿は、明治期以降に、大衆が「逸脱した母」とみなした乳幼児の母親像を明らかにする研究の一部である雑誌記事の内容に関する検討を行うものである。明治20年代に出版された女性雑誌に掲載された乳幼児の母親の言動に関する記事を抽出し、その内容を分析することで、乳幼児の母親のどのような言動が否定的に扱われていたのかを明らかにする。

筆者は、理想的な母親像に合致しないが一般的な母親ともみなされずに逸脱とみなされてきた母親像に焦点を当てるとともに、分析対象を女性雑誌だけでなく新聞記事にまで広げることで、保育に間接的に関わる大衆の見解も含めて母親の在り方を検討する研究を構想している。本稿はこの構想の下に、女性雑誌誌上で示された逸脱した母親像を雑誌間の比較を含めて考察する研究の一つに位置づけるものである。

母親像というテーマは、多くの分野で長年論じられており、近代日本において、家族や家庭の在り方は大きな転換期を迎えていた。有地亨は、民衆の家族観は封建制度の廃止や西欧思想の影響によって、明治30年代初頭に「家族制度を論じる人びと」には家族観が「確実に変化したと映ったようである」と指摘し、小林輝行も、明治後期の多様な家庭像の乱立の時期を経て、大正期には新たに『『子供本位』の家庭像』が提唱されるに至ったと述べている⁽¹⁾。その後も家族の在り方が時代とともに変化する中で、当然ながら母親の役割にも変化が生じ、小山静子や真橋美智子などが新しい母親像の形成・変遷の過程を明らかにしてきた⁽²⁾。

一方で、分析対象をより焦点化した研究としては、沢山美果子や深谷野亜、伊藤めぐみ、吉長真子、古久保さくら等の研究がある。沢山は、『女学雑誌』と『婦人と子ども』から、戦後新たに登場した『『育児担当者としての母親』でありながら良妻賢母像とは異なる』母親の姿とされた「近代的母親像」の形成を明らかにし、深谷は、1945年から1998年にわたる『主婦の友』の記事を分析し、「夫と子に尽くす母親」が理想とされた戦後から、多様な母親像の出現を経て、1990年代には新しい母親像が誌面で提示されなくなったことを明らかにしている⁽³⁾。そして、特定の地域や人物に限定して焦点化した研究としては、文部省普通学務局第四課の初代課長であった乗杉嘉寿を取り上げた伊藤の研究、岡山県で行われた母親教育を取り上げた吉長の研究、農村の母親に注目した古久保の研究等がある⁽⁴⁾。

以上のような先行研究では、理想的母親像、すなわち各時期に新しく形成された母親像のみが明らかにされており、理想的母親像の展開の裏でどのような逸脱した母親像が存在していたのか、もしくは、どのような母親の言動が理想像からの逸脱と大衆から見なされていたのかは明ら

かにされていない。その要因としては、第一に、理想像を国民に提示する女性雑誌や家庭教育に関する書籍が研究対象となっていたこと、第二に、女性学の観点から、女性がどのように地位を獲得してきたか、という視点が重視されすぎたことが考えられる。

また、保育学の視点からの研究は、教育学・女性学・家政学に比べて十分とは言えない状況にある。これは、第一に「母親」の定義が広義または狭義すぎたことが原因であろう。定義は各研究によって異なり、広義の場合は、妊婦から成人前までの子どもを育てる女性を、狭義の場合は、授乳やおむつ替えの期間など、非常に限定的な時期の子どもに接する女性を「母親」と定義してきた⁽⁵⁾。そして、第二に、保育学においては、永久欣也が指摘したように、保育を「国民的課題」として性格づけ分析する視点、すなわち社会学の視点を含めた研究の蓄積が少なかったことが原因と考えられる。秋田喜代美らが歴史や文化、社会などの「根底にある価値」を考慮せずに保育は検討できないとして2016年の著書で「発達保育実践政策学」を提唱したように、保育を社会全体が抱える「国民的課題」として捉える重要性がようやく注目されるようになった⁽⁶⁾。

以上のような研究状況の下で、本稿の課題は、第一に乳幼児の母親に関する記事がどの程度掲載されていたのかを分析することにより、乳幼児の母親への関心がどの程度あったのかを明らかにすることにある。第二に、各雑誌の記事では、どのような言動や価値観が否定的に扱われていたのかを分析することで、どのような「逸脱した母」の姿が形成されようとしていたのかを明らかにする。なお、本文中の引用では旧字体を一部改めるとともに、一部のルビを省略した。

1. 分析記事の選定と概要

明治20年前後、女性のための雑誌が次々と刊行された。本稿では、当時の女性向け雑誌の代表的存在となる『女学雑誌』の前身でもある『女学新誌』、その『女学新誌』の24号以降に携わった田島象二が関係する『女学叢誌』、その後の1887年7月から発刊された『以良都女』の3誌を取り上げて分析を行う。各雑誌の概要は以下の通りである。

表1 各雑誌の刊行期間及び冊数

	開始	終了	冊数合計
女学新誌	1884年6月	1885年9月	27
女学叢誌	1885年12月	1887年6月	23
以良都女	1887年7月	1891年6月	84

分析方法としては、各雑誌の目次から関連するキーワード⁽⁷⁾が含まれている、もしくは乳幼児の母親の言動に触れていると思われる記事を収集し、その後記事内容を確認し、乳幼児の母親に関して何等かの言及があった記事を抽出した。表中の執筆者の欄が空欄の記事は執筆者が記載されおらず確認できなかったものである。(表2・3・4)

表2 『女学新誌』 分析対象記事一覧

号	年	月	タイトル	執筆者
1	1884	6	幼児教育の心得	
5	1884	8	よき子を産む秘伝	山下石翁
8	1884	10	産前産後の注意	雑報（杉田玄端の時事新報の記事を転載）
12	1884	12	幼児教育の心得(二)	
14	1885	1	育児の注意	
16	1885	2	小児着物の心得	阿波 中野南畦
18	1885	3	婦人心得草其一	在静岡 青池晁太郎
20	1885	4	婦人の心得	越後 本間虎太郎
22	1885	5	小児育て様方法	竹田栄七
23	1885	6	我儘を戒しむる事	
25	1885	8	今の少女は第二明治の母なり	
27	1885	9	父母の戒め	東京 千万子

表3 『女学叢誌』 分析対象記事一覧

号	年	月	タイトル	執筆者
2	1885	12	子供の教育	12月20東京日日新聞より
4	1886	1	馬の乳	
8	1886	2	早婚の弊害	
11	1886	2	女子の十能	
16	1886	4	産湯の湯上げを縫う法	
22	1886	5	ケリー氏幼児教育学の翻訳	※原本不明
23	1886	5	ケリー氏幼児教育学の翻訳	
27	1886	6	幼児仕置方の注意	宮城県白石 本城よし子
28	1886	6	乳の出る法	
45	1886	12	産褥の処置法	飯倉片町 糸の家主人
46	1886	12	育児の種	矢守貫一『育児の種』より
47	1887	1	幼児教育学	
47	1887	1	育児の種	矢守貫一『育児の種』より
48	1887	1	育児の種	矢守貫一『育児の種』より
49	1887	1	女子の教育	矢田部良吉（大日本教育会演説）
52	1887	3	矢田部氏の女子教育説に就て	福原遜軒生
56	1887	4	妻たるものの為すまじき事	ガゼット新聞より
66	1887	7	幼稚保育の心得	岡山 秋蝶園主人 寄贈
67	1887	7	幼稚保育の心得	岡山 秋蝶園主人 寄贈
68	1887	8	幼稚保育の心得	岡山 秋蝶園主人 寄贈

表4 『以良都女』分析対象記事一覧

号	年	月	タイトル	執筆者
2	1887	8	女子の地位を進むるに付ての注意	
4	1887	10	女子の徳育	
5	1887	11	日本婚姻法に付ての所感	
6	1887	12	女子は男子よりも貞節ならざるべからず	
7	1888	1	小児の育て方	
9	1888	3	小児の育て方（其の二）	
10	1888	4	小児の育て方（其三）	
11	1888	5	小児の育て方（其三）※原文ママ	
12	1888	6	小児の育て方	医学士 竹中成憲口述
12	1888	6	小児を素直にする法	
13	1888	7	家政（育児法／小児育て方習慣の話）	医学士 竹中成憲口述
15	1888	9	小児と物語本	
15	1888	9	禽獣を虐く取扱はぬ風習を子供に付ける事	
17	1888	11	産前の心得	松嬢
20	1889	2	日本の小児	朝野新聞転載
22	1889	4	通信問答（育児法の書物）	※読者の質問に答える記事
23	1889	5	通信問答（小児の寝起）	※読者の質問に答える記事
24	1889	6	小児の育て方に付て	
25	1889	7	通信問答（小児の寝小便を治する法）	※読者の質問に答える記事
27	1889	9	看病法一斑——子供の取り扱い方	フロレンス・ナイチンゲール述
28	1889	10	閨の心得	フロレンス・ナイチンゲール述
39	1890	1	日本婦人（英国雑誌掲載文）	ガールズ・OWN・ペーパー転載
57	1890	6	通信問答（人乳と牛乳）	※読者の質問に答える記事
67	1890	8	小児取扱時間の数	
76	1891	1	小話第一 乞食の子供	美妙斎主人

『女学新誌』では12、『女学叢誌』では20、『以良都女』では25の記事で乳幼児の子育てに関する記載が確認できた。『女学新誌』では、第16号以降になると、読者の投稿による記事が見られるようになる。第27号の「父母の戒め」は、自身の考えを述べた後、「茲に徳川家康公の竹国二君を教育む技折として二代將軍の北の方へ贈れたる文あり聊さか風教の助けにならんか」と思いその内容を紹介している。『女学叢誌』でも数点読者の投稿が見られ、第66号から3回にわたって掲載された「幼稚保育の心得」は、岡山の一読者が自らの経験をもとに「頭の毛を剃るべからず」「玩具物を撰擇べし」といった心得を多数列挙した記事である。3誌ともに読者が経験や勉学で得た知識を誌面上で共有しようとする動きが見られる。

また、編集者は女子教育や男女同権といったことには積極的に関心を寄せている人々であったが、決して乳幼児の子育ての専門家ではない。そのため、乳幼児の子育てに関しては新聞や書籍の転載記事が多くみられる。『女学叢誌』では「ケリー氏幼児教育学の翻訳」が連載されているが、出典は明らかになっていない。同誌は欧米の新聞や雑誌記事の紹介・翻訳を多く掲載してい

た点で特徴的であり、この連載もそうした欧米生活の紹介の一部であった⁽⁸⁾。同連載は第31号で一端終了となるが、第41号から「頻りに掲載せんことを望まるゝ」声が多くなったとして、連載が再開された。『以良都女』では、「小供の育て方」が連載されているが、無記名であることから雑誌編集者が執筆を担当し、医学的な内容は竹中の口述によるものであったと考えられる。

各雑誌ともに、女子教育論や女子職業論などを論じる記事に比較すると、乳幼児の子育てに焦点を当てた記事の掲載数は少ないが、連載再開希望や読者投稿、通信問答への投稿の様子から、乳幼児を育てる母親、およびそうした親子に関わる関係者である読者が、どのように乳幼児を育てるべきかに関心を寄せていたこと、その模範を雑誌の記事に求めていたことはうかがい知ることができよう。

2. 記事内容分析

ここからは、雑誌別に記事内容を分析し、どのような言動や価値観が否定的に扱われていたのかを分析する。

(1) 『女学新誌』

第1号に掲載された「幼児教育の心得」では、子どものしつけに関する注意が掲載されている⁽⁹⁾。

世間の母親たるものは平生幼児が物事を包み隠すの悪癖を養ひ成さざるやうに注意うべし若し此等の悪癖を養ひ成すときは成人の後に至りて隠すべからざることをも包み隠して他人に疑はるるに至るべし加之ならず詐偽欺罔等の悪癖は皆此れより出で来るものなり而して世間衆多くの母親が幼児を取扱ふの際に思はずも此等の悪癖を誨ゆるに至るは甚だ嘆息すべきことなり

幼児期に母親が「物事を包み隠すの悪癖」を子どもにつけさせることは、その後の詐欺行為にまで繋がっていくとされている。同記事では良くない母親の関わり方として、「此れは誰には内々なるぞ」といった秘密を作るような関わり方が挙げられている。「我儘を戒しむる事」(第23号)でも、しつけについて取り上げている。この記事は無記名であるが、一般読者からの投稿欄に掲載されたものである。同記事には、人の我儘な性格は「幼きとき其親の教へ正しからず唯云ふ儘好む儘に任せ悪しき事もさせたる其の我儘が其儘にかしこくなり一生ぬけぬ病となる」ため、子育ての際は「注意」するようにと記されている⁽¹⁰⁾。

そして、「今の少女は第二明治の母なり」(第25号)では、これから結婚・出産を経験していくであろう若い女性読者に向けて、母親の「義務」について論じている。これから生まれてくる子どもたちがどのような人生を送るかは、母親の「感化教育」次第であると訴える。そして、いわゆる「子煩悩」は「真の愛」ではないと述べ、その弊害を以下のように述べている⁽¹¹⁾。

母の児を愛すること分外に厚くして児を教育することの分外に薄きは倭漢土の通弊なり而して其愛を分析して之を見るに其愛は真の愛に非ずして所謂子煩悩でふことに過ず何となれば事々物々愛に失して其児を我儘に導き我儘の極點は其子を懶惰放逸^{いれ}を為し世に齒られざる白痴と為すこと往々ある例しなり

そして、「真の愛」とは「慈愛と威とより成立」するものであり、書物を読むことや、裁縫・諸芸といった学びは次世代の日本国民を育てるために生かして行かねばならないと結んでいる。複数の記事で、子どもを愛するあまり子どもを甘やかすこと、我儘を許してしまう母親の姿が否定的に捉えられている。しつけの限度についてはどの記事でも触れていないが、子どもの要求を全て叶えようとする母親の姿は明らかに否定的な姿として描かれている。

その他には、「よき子を産む秘伝三則」(第5号)では母親が若すぎる、または適齡期以上であることは良くないとされ⁽¹²⁾、読者の投稿と思われる「婦人の心得」(第20号)では、母親は「成るべく快活の氣風を養ひ常に幸福なる心持をなすこと大切なり常に鬱々として不平不満なる母親の膝下に育つ子供は雨露の潤ひを得ざる草木の如し故に母たるものは童子や童女の為に世事面白からぬ時にも快き氣持を養ひおくは肝要なり本心を清くし節操を守るなどは勿論一の罪をも犯さぬやうに心掛くべし」として、母親はいかなる時も明るく振舞うべきであり、不平不満を漏らすような姿は好ましくなく、当然のように清廉潔白を求められている⁽¹³⁾。

(2) 『女学叢誌』

『女学叢誌』でも早婚に関して「早婚の弊害」(第8号)で取り上げられており、出生数の少なさや死産の多さは早婚が影響していると論じられている⁽¹⁴⁾。また、母乳に関する記事「馬の乳」(第4号)、「乳の出る法」(第28号)、「育児の種」(第46号)が複数確認できた。「乳の出る法」では母乳以外の乳を飲ませることに触れているが、「いまだ百日たらぬ小児にはあまりよろしからぬなり矢張母の乳の方が相応すると云へりされば産後に乳の出ざるときは如何にも難儀なるものなれば充分足るやうになれば其小児こそ誠に不愍なり」と述べられている⁽¹⁵⁾。「育児の種」では医学的に「乳汁の善悪」を見分ける方法が紹介されているが、神経質、癌など持病がある場合や母親が貧血である場合や月経中は「乳の性変りて」子どもの健康を損なうと解説されている⁽¹⁶⁾。母乳が十分に出ない母親や、何等かの疾病が原因で母乳を与えられないと判断された母親は一般的な母親の姿からも逸脱してしまうことが明らかである。

「女子の教育」(第49号)は、帝国大学で開催された大日本教育会の常習会において矢田部良吉が演説した内容を記したものである。その中で矢田部は、女子教育でどのような内容を扱うべきかについて述べた際、女性は元来「性質虚弱」であるという前提条件のもと、以下のように女性が男性と同等の学問を修めることの弊害を述べた⁽¹⁷⁾。

女子が男子同様に勉強して或は医者と為り或は代言人と為り或は専門学者となりて身体に格別の害を覚えざるにもせよその嫁して母となるに及びては常に身体の思はしからざるか乃至はその擧^{もう}げたる小児の虚弱にして十分の發育をなさざるか或は曾て勉強の為に生殖機を充

分發育せずして全く子を孕まざる等の事あるは已に欧米の経験に拠って明かにわかり居るなりそれ故に女子にして代言人とならんとか著述家にならんとか乃至は医者とならんとかいふ如き太だ高大なる志を抱き他に婚嫁せずして自己の力に食んと覚悟する者は格別にして此等の女子は男子同様に高等の教育を受けて夫々専門の学を修めねばならぬ訳なれども若も一般女子の教育をば斯くの如く高尚になしたらんには後來日本社会に如何なる弊害を生ずるや未だ知る可らざるなり是を以て一般女子の教育は先第一に其嫁して生涯身体の健康を保ち健康なる小児を挙げんことと能々注意せざる可らず

矢田部は、男性に比べて虚弱な女性が男性と同等に学び同じような職に就いて仕事を行っていることは、女性の健康を害することになり、それは生まれてくる子どもの健康や發育にも影響していくと述べている。医者や著述家になるなど「高大なる志を抱き他に婚嫁せずして自己の力に食んと覚悟する者は格別」にして、結婚し母親になろうと考えている「一般女子」の教育をそこまで「高尚」にする必要はなく、「健康なる小児を挙げんこと」のほうが重要であると述べている。

この内容に対する反論記事が第52号に掲載された。福原が記した「矢田部氏の女子教育説に就て」では、女性が元来虚弱であるという矢田部の前提に関して、矢田部自身の演説内では説明がなかったために「遺憾」であると指摘している⁽¹⁸⁾。

この時期、男女同権が叫ばれるようになり、これまでは男性のみが担っていた職に女性も関わるようになっていこうとしていた。また反論記事にあるように、さまざまな知見が国内に入ってきたことで、女性らしさ、というものも転換期にあった。そうした中で、矢田部が言うところの「高尚」な学問を修めて専門家となる女性が母親となり子どもを育てることは、それまでの一般的な母親の姿からは明らかに逸脱していたために、新しい女性の姿として肯定的には描かれず、当時の価値観では受け入れにくい姿として捉えられていたことがわかる。

第21号から連載が始まった「ケリー氏幼児教育学の翻訳」の大部分は就学後の子どもの発達や学校教育に関してである。乳幼児に関する記載が確認できた第22、23号では、日本国内では一般的になっていなかった幼稚園と家庭教育の関係性や役割について記されている。

第66号から68号にわたって掲載された「幼稚保育の心得」では、非常に具体的な子育てでの注意事項が列挙されている（表5）。

表5 掲載項目一覧

掲載号	掲載項目
第66号	頭の毛を剃るべからず／抱負ことを少くすべし／頭を打つべからず／労働に慣れしむべし／無理に眠らしむべからず／玩具物を撰擇すべし／幼児の遊戲を止むべからず／幼児の希望は成るべく達せしむべし／懇切に告知すべし／虚言を以て教ふべからず／妄りに叱り懲すべからず
第67号	大声を発して叱るべからず／化物を以て嚇すべからず／妄りに食物を與ふべからず／自愛の心に逆ふ可らず／過を改むる習慣を養ふべし／自ら其非を悟しむべし
第68号	善きことあれば賞むべし／幼児には画の心あり／強ひて読み書きせしむ可らず／餘り早くに入学せしむべからず／衣服を洗濯にすべし

前掲の『女学新誌』では、しつけに関して甘やかすことや我儘を許すことは良くない子育ての姿として書かれていたが、それらの記事から2年後に掲載されているこの記事では「幼児の希望は成るべく達せしむべし」として「幼児は素より無分別」であるために「父母に対し無理なる事を云ふ」こともあるが、「成るべく其身体の健康を害し悪習を養成する等の外は其の希望を達せしむべし」との見解が記されている。また、「妄りに叱り懲すべからず」においても、「妄りに叱り懲すは宜しからず殊に罵り嘲けることは努め謹むべし」と記されている。我儘を認めないことや、必要以上に叱責することで、かえって子どもの「良性を損ふ」ことになり、「我よりも弱きものと見れば直に罵り嘲けるやう」な子どもになってしまうと述べている⁽¹⁹⁾。これらの記事の執筆者である「秋蝶園主人」がどのような立場の人物であるか、記載内容が何に基づいて記されているのかも記事には記されていないが、子どものしつけについて、徐々に価値観が変化してきていたようである。

(3) 『以良都女』

生後1年未満の乳児の死亡率が、かなり高水準であった当時、子どもの健康は非常に重要視されていた⁽²⁰⁾。「日本婚姻法に付ての所感」(第5号)では、女性の早婚の弊害として「男女年齢の差異甚だしきときは体質互いに相適合せず従て生児の發育及び稟性^{うまれつき あしき}に悪結果を及ぼすは勿論年の少長^{わかきとしゆき}に由て性質に大異ある」⁽²¹⁾として、夫婦で年齢が離れすぎていることが子どもの發育に悪影響であると指摘している。さらに、「小児の育て方」(第7号)では、子どもの病気の主な原因は「不潔、風邪、悪乳」から起きる、十分に母乳が飲めない場合は「虚弱」となり「生涯壮健なる人とはならぬ」とまで指摘している。同記事、および「通信問答(人乳と牛乳)」(第57号)でも、母乳が不十分、もしくは母親に「遺伝病」がある場合は乳母に頼ったり「牛乳」「凝乳(コンデンスミルク)」の活用を推奨しているが⁽²²⁾、母乳が十分に不出ずに子どもが乳を飲めない状況になることが非常に問題視されている。「小児の育て方(其の二)」(第9号)では、生まれつき病弱である子どもの死亡はやむを得ないが、そうではない子どもの死亡は「親がわるい」のであり、「消化機^{ママ}(胃腸)病と呼吸機^{ママ}(咽喉及び気管支)病」は親が注意すればかからないと断定している⁽²³⁾。身体を清潔に保つ、薄着をさせない、といった注意事項も列挙しながら、生後間もなくは問題なく成長していた乳幼児が罹患した場合は、乳幼児が病気にならないよう対策を講じなかった保護者の責任であると見なされていた状況が記述から窺える。

ナイチンゲールの叙述の転載の一部である「閨の心得」(第28号)では、子どもと大人が寝室を共にすることは避けるべきであるとの見解が示されている⁽²⁴⁾。

まづ子供が餘り幼いといふ處から祖父母や父母が之を愛するあまり其子供孫達と一途に寝る、一寸表面から見れば如何にも小児のため宜さうです。が、実を言ふと子供は活気の強い物、そして老人は活気の少ない物、それ故老人と子供を一途に寝れば勢ひ子供の活気即ち熱は老人の身体に吸ひ取られます。(中略＝引用者)老人と同衾して居る小児は多く虚弱で、或は顔が蒼白過ぎるとか、風邪に罹り易いとか、胃が弱いとか、何かしら壮健には行かぬ物です。それ故に一寸考へると無慈悲なやうですが、小児をば成るべく一人で寝かすのが宜し

いす。勿論生まれた計^{ばか}りの赤子や、またそれより大きくても猶一人で寝るに堪へぬ程の年齢の物を無理に一人で寝させるのは又悪いす。が、些し成長して五六歳になったら既に最う一人で寝かすに限りす。

老人が子どもの「活気」「熱」を吸い取ってしまうために、子どもが「虚弱」になると考えていたようである。それ以外にも「第一病気を伝染する事、第二電氣質の相違から神経上に害を受ける事」から子どもが大人と一緒に寝ることは害が多い、と述べている⁽²⁵⁾。

こうした記述は「小供の育て方（其三）」（第10号）でも確認できた。この記事では、「祖母さんのある家にては兎角小供の育ちかよろしくありません」として、以下のようにその理由を説明している⁽²⁶⁾。

小供は湯、阿婆さんは水です。だから阿婆さんが抱て^{たよ}御寐ると湯と水を混ぜたと同じで小供は熱を奪られ祖母さんは熱を貰ひます。大切な熱を小供は奪られますから小供は^や疲れます、段々弱て死にます。だから祖母さんに寵愛されるのは小供には難有迷惑で西洋では生みの親でも抱いて寐ずにケツか軽い暖な夜具の中へ一人で寝かします。

祖母と乳児が一緒に寝るだけで乳児が不健康になっていくとされている。現在では、核家族化が進み祖父母に頼れない母親の不安と負担が注目されているが、この当時、祖父母の協力を仰いで子育てを行っていく姿は、同居している場合であっても理想的な姿からかけ離れた姿として捉えられていたようである。

母親の言動に関して言及したものとしては「女子は男子よりも貞節ならざるべからず」（第6号）、「産前の心得」（第17号）がある。前者の記事では、「女子の長所は美德」であり「女子の不貞は男子の不貞よりも其害甚しきこと」とであると述べられている。その理由は、仮に夫が不倫して、不倫相手が妊娠した場合は、「父母共に歴々」たる状況であるが、妻の不倫の末に妊娠した場合は、誰が父親かわからず、「母の手一つ」で育てられる不幸な状況になってしまうからだとして説明されている。そして、「男子の不貞なるか為女子も亦不貞にして可なりといふが如き卑劣なる見は自己の地位を高むるに熱心なる女子の懐くべき處にあらざるなり」として、男子が許されるから女子も許されるべきだとの同権を主張することは「卑劣」な考えであると締めくくっている。

「産前の心得」では、「芝居小説など感動を与へるもの」は「大禁物」とであるとの私見が述べられている。「小供の育て方」（第12号）では、医学博士の竹中が子どもの「癩」（ひきつけ・痙攣など＝引用者）について、両親に「癩癩」「ヒステリヤ」「酒癖」「神経衰弱症」「哺乳の際烈しき精神感動（夫婦喧嘩や凶事など）」があると子どもは「大抵癩もち」とであると解説している⁽²⁷⁾。妊娠時期から授乳時期に至るまで、母親が悲喜のいずれかによらず大きな感動を起こすことは子どもにとって良くないことであると考えられていたようである。

「小供の育て方（其三）」（第11号）、「習慣の話」（第13号）では、商人や職人の家庭の子どもと関わることにについて、以下のように苦言が呈されている⁽²⁸⁾。

裏店の女房さん達は責檻こそ教育の最良なる方便と心得違てイザともすると無垢の小供を「エー此餓鬼め」とか「尼チヨメ」とか申て頭をピシヤンとやりまして親切に諭したり、頼だりしませんから小供の方でも御覧なさいどれもこれも剛愎で「此の尼めひどいぞ」とて打たうと思ひますとベツカコーをしたり御尻を叩いたりして逃げます。

(「小供の育て方 (其三)」より)

大工の日雇取の倅は遊ぶときにも木遣節の口真似をしてちゃん爺を学び裏店の女兒は質置の真似をして山神の下稽古をいたします。(中略＝引用者) 歴々の坊チャマや嬢チャマが日雇取の倅や裏店の女兒と遊びますと良いことは見習ひませんやはり木遣節や質置遊をいたします。これを打棄ておきますとソレ親達に似もつかぬ道楽息やお転婆娘が出来ます。

(「習慣の話」より)

前者は子どものしつけは「柔和に親切に」すべきという主張の中で良くない事例として取り上げられたものであり、後者では、明確に「坊チャマや嬢チャマが日雇取の倅や裏店の女兒と遊びますと良いことは見習ひません」「達に似もつかぬ道楽息やお転婆娘が出来ます」と述べ、関わりを避けるように勧めている。

ただし、子どもを叱ることが否定的に捉えられていたのではない。「小供を素直にする方法」(第12号)、「小供の育て方に付て」(第24号)では、子どもを叱ること、我儘を許しすぎないことについて以下のように述べられている⁽²⁹⁾。

叱るのか慰めるのか分らぬ御母おつかさんが有ますが是では素直にはなりません。若し順はぬ時は力を以ても順はせるがよろしい。責罰は實に必要です。是れにつきては後号に述べますが責罰は無暗にやりますと裏店の餓鬼の様ふになります。／責罰を加えられたる時小供が不平を起さずに我が叱かれたのは我があしき為なりと思ふ様に責罰を加えなくてはいけません。(中略＝引用者) 随分経験に乏しき母は小供の天性を漸々曲らぬやう導かんとはせずしに壓しつけやうよする方もありますが是は水を治むるに水を堰き止めると同じて堤は直にぎれます川をさらッて水を海に流さなければ水は治りません。

(「小供を素直にする方法」より)

小兒を育てるに付ては幼小の時から我意我慢の起らぬ様己の意志は屡々儘にならないことがあるといふことを教へ込まねばなりません。若し小兒を氣隨に育て上ぐるときは其成長して世間に出でたる後万事其意の如くならぬを見ては忽ち失望落胆するか或いは不平を懷て狂氣に陥り遂に一生廢人となるものが随分あります。(中略＝引用者) 小兒の氣隨氣儘なることは幼小より抑制しなければなりません。(中略＝引用者) 小兒の啼き出して止みませんときには大抵玩具か又は食物を与へて之を宥めます。是は一は母親が小兒の啼くことを面倒に思ひ他の方法を以て之を宥めるの煩を厭ひ只目前の快樂を与へて之を醫せんとすると又一つは小兒の愛に溺るゝ餘其請求を拒むことが出来ないからです。是か即ち後來に至て小兒の我儘

を増長せしむる大なる原因となります。小児は其目前の結果のみに依て判断する外出来ませんから啼けば必ず快樂を得請求すれば必ず己の欲するものを得ることが出来ると思ふますそして終には一の習性となつて己の思ふことが通らねば承知せぬと云ふ様に成り行きます。

(「小供の育て方に付て」より)

他の雑誌と同様に、ここでも、子どもの我儘を増長させないように子どもの要求を拒み我慢を経験させること、「我が叱かれたのは我があしき為なりと思ふ様に」叱ることが母親には求められた。ここでも「責罰は無暗にやりますと裏店の餓鬼の様ふになります」と記されていることから、子どもを叱れずに子どもに尽くしてしまう母親だけでなく、子どもを一方的に叱りつけている母親の姿が『以良都女』の誌上では否定的な姿として捉えられていたことがわかる。

おわりに

本研究ノートでは、3誌を取り上げて、各雑誌の記事内容を分析した。今後さらに分析雑誌を増やしていき相対的な考察を試みる予定であるが、現時点で3誌を分析した結果を以下にまとめておきたい。

各記事では直接的に母親の言動を批判・否定することはなかったが、理想の母親像や母親の責務だと考えられていたことの解説で間接的に次のような母親の姿が否定的に取り上げられていた。①年齢の若い母親、②母乳が十分に出ない、あるいは不健康である母親、③健康に問題のある子どもの母親、④子どもの我儘を許している母親、⑤商人・職人の家庭の母親、⑥祖父母の手助けを受けて子育てをしている母親、⑦新しい女性の在り方を体現している母親、である。

④は3誌ともに確認できた内容であるが、1887年には子どもの自由奔放さを抑制する子育てを否定的に記した記事が確認できた。しかし、『以良都女』の1888年、1889年掲載の記事では依然として子どもの我儘を認める母親が否定的に書かれていることから、先行研究で指摘されていたように、家族観の変化が進む中で、子どもの我儘や甘えにどのように対応するかという母親の姿に関しても、新旧混在の状況を経て見解が徐々に変化していたと考えられる。②③は母親の努力では解決しないものも当然生じていたはずだが、母子のいずれかが健康に問題が生じた場合、母親がその責を負っていたようである。⑤に関しては、女性雑誌読者の階層を意識した内容である。⑥⑦に関しては『以良都女』でのみ確認された視点で、関連記事は少ないが、非常に注目すべき視点である。この時点では否定的にみられていたこれらの姿がいつ頃から肯定的に受け止められるようになり、新たな「逸脱した母」の言動がうまれていったのかは、今後の研究で追跡していく必要がある。

本研究は JSPS 科研費 JP19K14192 の助成を受けたものです。

注

- (1) 有地亨『近代日本の家庭観 明治篇』弘文堂、1977年、127、128頁。小林輝行『近代日本の家庭と教育』杉山書店、1982年、196頁。
- (2) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年。小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年。真橋美智子『「子育て」の教育論』ドメス出版、2002年。
- (3) 沢山美果子「近代的母親像の形成についての一考察」『歴史評論』第443号、1987年。深谷野亜「母親像の変遷に関する史的考察」『子ども社会研究』第5号、1999年。
- (4) 伊藤めぐみ「乗杉嘉寿の婦人教育論——その意義と限界」『日本社会教育学会紀要』33、1997年。吉長真子「1910-20年代の児童保護事業における母親教育——岡山県鳥取上村小児保護協会の事例から」『日本の教育史学』第42集、1999年。古久保さくら「昭和農村期における母役割規範の変容——雑誌『家の光』をとおして」『女性学年報』11、日本女性学研究会『女性学年報』編集委員会、1990年。
- (5) 真橋『前掲書』。中馬愛「乳児死亡率対策における母親観の変遷——大正期の保健衛生調査会の検討を通して」『鶴山論叢』第3号、鶴山論叢刊行会、2003年。金子省子「授乳論にあらわれた母親観の変遷」『愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学』第32号、1986年。
- (6) 秋田喜代美監修『あらゆる学問は保育につながる』東京大学出版会、2016年。永久欣也・飯田哲也編『保育の社会学——子どもとおとなのアンサンブル』学文社、2014年。
- (7) キーワードは、「母」「小児」「産前産後」「幼児」「子」「子供」「小供」「乳」「育児」など。
- (8) 小山静子監修『女学叢誌／文明の母【復刻版】解題』柏書房、2015年、9頁。「洋服裁縫の原理」「婦人の選挙権」「ワールン氏西洋料理法の翻訳」などが掲載された。
- (9) 「幼児教育の心得」『女学新誌』第1号、1884年、11頁。
- (10) 「我儘を戒しむる事」『女学新誌』第23号、1885年、288頁。
- (11) 「今の少女は第二明治の母なり」『女学新誌』第25号、1885年、305頁。
- (12) 「よき子を産む秘伝三則」『女学新誌』第5号、1884年、59頁。
- (13) 「婦人の心得」『女学新誌』第20号、1885年、240頁。
- (14) 「早婚の弊害」『女学叢誌』第8号、1886年、133頁。
- (15) 「馬の乳」『女学叢誌』第4号、1886年、67頁。「乳の出る法」『女学叢誌』第28号、1887年、448頁。
- (16) 「育児の種」『女学叢誌』第46号、1887年、456-457頁。
- (17) 「女子の教育」『女学叢誌』第49号、1888年、52頁。
- (18) 「矢田部氏の女子教育説に就て」『女学叢誌』第52号、1888年、102-103頁。
- (19) 「幼稚保育の心得」『女学叢誌』第66号、1887年、399頁。
- (20) 厚生労働省「令和元年 人口動態統計」、宮本恭子「明治期からの助産師職の発展と乳児死亡の関連——鳥根県の検討」『社会医学研究』第31巻2号、日本社会医学事務局、2014年。令和元年の乳児死亡率が1.9（出生千対）に対して、1886～1890年の乳児死亡率は11.7（出生百対）である。
- (21) 「日本婚姻法に付ての所感」『以良都女』第5号、1887年、2頁。
- (22) 「通信問答（人乳と牛乳）」『以良都女』第57号、1890年、12頁。
- (23) 「小供の育て方（其の二）」『以良都女』第9号、1888年、73頁。
- (24) 「閨の心得」『以良都女』第29号、1889年、3-4頁。
- (25) 同上、4頁。
- (26) 「小供の育て方（其三）」『以良都女』第10号、1888年、104頁。
- (27) 「小供の育て方」『以良都女』第12号、1888年、164頁。

- (28) 「小供の育て方（其三）」『以良都女』第11号、1888年、130頁。「習慣の話」『以良都女』第13号、1888年、185頁。
- (29) 「小供を素直にする方法」『以良都女』第12号、1888年、164-165頁。「小供の育て方に付て」『以良都女』第24号、1889年、9-10頁。

(受理日 2021年1月6日)